国花万宝

日本居家秘用　三

目録　三

漆細工（うるしざいく）
蒔貝の付やうならびにの法
つぎ物繕 絵まき其外の様し
なをし一切ぬり物細工

用火（ようくわい）
ひとりちゑ
からくりの法ところの火用心
せうじ油また火のいるを消を
法其外火災の時の心得
るすくしく記せり

紙細工（かみざいく）
張附（はりつけ）
一切之（いろいろの）
口傳（くでん）
びやうぶをまの張やう
表具の仕やう表具物の仕立
唐紙うちわ掛物ようりやう
ろくの物しやう書物の表紙
肉糊の法ぬり張仕やう
額表やうじでうちやう
紙てうりの法ふのりの法
書画の表装け物
付ようながらしやうのり
油紙のりえのこしらへやう
其外紙ざいく一切を記せり

ヲ 8
3370
3

日本居家秘用巻五目録

(一)漆細工

此部ハ一切漆細工地さひの
ねやうそのへやう塗やう畢漆
の方蒔絵の絵青貝の貼
やうあり其道具交換しら
をはくろひやうまて残らす
しくあらハ

○用火

此部ハからの方炬火の
法老人小児火燵の火は用
ひやう新んの炬もんやう合
物類それ／＼に火の分

8 ラ 号 3370 巻 3
昭和十六年四月八日購求

をけしやうじもて火を用
ゆるは益阿の事也　火気の彼
ふ差ある事よくよく心得べく
きるべし

◯漆細工

▲堅地乃地さびれ方　砥乃粉を
水にて練りぜしめ漆にて砥
の粉れものをよく混じ練り
あはすべし
▲中堅地乃地さびの方　砥れ
粉を水にて練りぜしめ漆と
水とを等分にして能まぜてよく
練りあはせ堅く水に浮じ
黒合にて附る乃砥れ粉に

絞りまぜる

▲澁地乃地さびれ方 澁地乃
地さびハ砥の粉を生漆にて
絞り地さびにとる也

▲糊地乃地さびの方 糊地乃
地の地さびハ砥の粉を米糊
にて絞り地さびにとるこ
とも佛師さび又ハどろさ
びといふ

▲蠟色墨地塗乃法 先木地
にこくそ飼ひし布をきせ

隅にハ角ぐくとふきせるを
総着といひ一面にきせるを
袋着と云ふ布乃着せやうハ
布にて先漆を薄めて能
ほどよくの上紙地乃粉をせ
し先漆に絞りまぜる紙にて
て布乃目紙わりうづく漆せ
よくかし瓦乃やうなるとの
ふて能よく紙を干よく紙こう
粉をせし先漆に絞りまぜ
ころを以て地乃粉のかしら

をぬりかつて漆をよくかわかし
何ぞ砥にてよくとぎそれ上
紙漉れ粉をまぜし漆にて
練りまぜたるを紙にてこし
乃かしら紙ぬりかつて漆を
よくかわかし砥にてよくとぎ其
野漆にて一返ぬりまたさびの
如くかつら紙又さびにて
塗しそのひすまして一返ぬり
そのよ紙生渋三返ぬり一返
く木賊にてみがきそれ上

を又吉野漆にてまわり中塗去
ハ吉野ならぬ漆に蠟色なれ
ぬ漆と等分にあはせよくね
りて漆をかわかし上塗をと
ぎし蠟色ならぬ漆にてむ
らをぬり漆をよくかわかし
蠟色すりにてとぎそれより
をれうしまり漆にて油や
を混ぜ漆を拭し角粉を
指にてよくふきてみがきそれより
色をつける

▲真塗の法　木地にても
紙はりし地を堅地さびに
中塗までは花塗のごとく
ぬりて上塗は油いれずふく
ろみ漆にて是を真塗と
いふ　それは賜布の切にて
うちきざみ粉にしてしめ
漆に粉のまぜてはるなり
▲花塗乃法　本地に地さび
をよくし漆をかけし後に
てとくらの上紙吉野漆

にて一返ぬりまたさびのひとへ
らかう紙又さびにてなんほ
う紙をしうの上紙をひすを
にて一返ぬり生漆に二返引
一返く木賊にてみがきての
上紙吉野漆して三返ぬり
漆を乾し上塗ハ花色なる
か漆までひらる紀やうにぬる
色し但上塗の時おまてを
ふとりかきば漆かまて好
うしろより紙面八紙様を

ぬり炭火にてよくして側に
なれば両肌をもみ戻し刷
毛にてかわりて行れたんを細く
けずりて末塵のごとくにして繊
とるべし

▲びやくだん塗乃法　木地を
吉野漆にて一返ぬりその
上の箔下を地入ざる所を
漆にて一返ぬりて箔
を置ところへ入漆をかけし
上塗には梨子地にする也

漆にてぬぐふべし　但漆のり
多く付ときはぬぐひふくべし　上塗
漆はすきにて漉し漆乾て
て後ハ箔をぬりつぶしびやく
だん乃色あしくなれバなり
るゆゑ漆に樟脳をおく也
炭火にかけよく練りねかせ
よし紙にて四五返よくこしべし
練かたは漆水のごとくやはらく
をすてゝぬればびやくだんの
色よし

◢春慶塗乃法　檜類の春
慶ぬりハ下地を山梔子乃
汁にて染その上に生渋三
遍ぬりて乾し但一遍ごとに
よく乾し其乃木賊にてみが
きその上に吉野生漆をそ
三遍ぬりて乾し但一遍くふ
ろへ入てかわきを乾し夏ハ日
乃中二遍冬ハ一遍ぬりて
乾まで乾し上塗は吉野の
よくこしたる漆に生漆五分

油二分合せまし紙にてよく
こしあつきはけにてむらなきやうに
ぬるべし

◢早漆乃方　桐挟をぶ川を
春慶ぬりは下地を右の
ごとくぬり中塗ハ吉野の生
漆を水と等分にかばて水を
入箆にてまぜあはせ漆に水よ
く和合たる時それ漆をそこ
遍ぬるなり但一遍く宛
いれかし乾しその後漆

かくあり是紙にや漆(うるし)と
いふ漆むら付あるまでも木(き)
目(め)に漆こミたる上塗とも
に奇麗(きれい)に出来(でく)るなり上塗(うはぬり)
は右乃春慶塗(しゆんけいぬり)のごとく漆
を又薄くぬるなり

▲わ紀合塗(わざぬり)乃法　黒青漆(くろせいしつ)の
わ紀合塗は下地を灰墨(はいずみ)
にてぬり本朱乃下地ハ安(ごん)
摘(がく)よくぬりての上紙生渋(きしぶ)
三遍(へん)ほどくあり一遍く溜(しめ)し

まる木賊(とくさ)にてよくとぎたんぐにて
の上紙右乃早漆(さうるし)にて三遍(へん)
ぬり一遍く漆(うるし)を乾(かわか)し　扨
上塗(うはぬり)は吉野(よしの)にて漆(うるし)に油
二分加(くは)へうし紙にてこして
ぬりかえやうにぬるなり

○但灰墨(はいずみ)にてときよせて
と水にて練る時に紀て泥(がい)し
うくし酒をお加(くは)へ重は上を
まぜる紙生渋(きしぶ)にて練り下地(したぢ)
をぬるなり

▲溜塗乃法　真乃溜ぬりハ
下地ニ目さびをし漆を乾
し砥ニてとぎそのうへに紙繋
汁をぬり生漆三返引て
そのうへに吉野漆にて一返
ぬり上塗ハ溜漆にてむら
までむらなくぬるべし
○次乃溜塗ハ木地をよく白汁
にてぬりもめん切にてみが
き薄膠を一返ひき其のうへ
を溜塗にてぬり又漆にてぬる

かじむらなくぬるべし
▲赤銅ニ能葉をたより地さび
乃しかり八砥乃粉一ツ袋水ニ
て練り胡桃乃粉二両入せし
め漆六分ニ吉野漆三五右一
所ニ練りよせて地ニ用ゆれ
ば赤銅のむびニなつめ等も
よく葉紙たより
▲造桐油漆法　桐油一合
滑石五分　蜜陀僧二銭　白礬
三分　右文火ニて練りぬべし

揚る時灯心を立てたされ
ざるを度として色ハ好みにまか
たがふべし是代竹ふかられ
竹れ筒に入置べし
○又方　密陀僧　薫陸各五
榛乃葉三枚　胡麻油　見合
右文火にて半時だまり練り
時に漆にかへてぬるべし
下地ハ礬水地をしその上
紙布の油にてぬるべし
▲唐桐油漆乃方　桐油一升

荏七合に藤じ丹を一両入よく
まぜ煉り油となるまでねる時
さめし墨玉合羽又桐油漆に
用ゆる也此油ひおことなくる
はやし
▲青貝付る法　先生漆まて
下地をぬり青貝を付さ
びふてぬりあぐべしさび
八漆をひらめるべし中塗ハせ
しめ漆に蝋墨に加へてね
溶べし乾る時加しやう

しおろ炭乃小口ふてよく磨
しそうの上絵蝋色漆ふて
一返ぬりの上絵石のごとく
とぎてすり粉にて津やを
はけうの上絵吉野漆ふて
すりてぬぐひとりそれより上を
角粉にて津やを付る

▲青貝模様付る法　青貝ふ吉
野漆にて絵をかき絵乃裏
を漆ふてぬりうの漆を能
乾し挽ひ絵乃酥ふ漬置け

八貝やわらぐ迄酥より取出し
絵乃形を小刀ふて切ぬ花
小紙を切まぜくいぬやうにも
自由ふある

▲蒔絵乃方　また絵ハすし
め漆ふ絵漆をお加へ朱紙
合しそろを以て何まても
絵をかきそのよへかんがり
ふて粉をほくべしそのよ絵
吉野漆にてすりぬぐひ取
と蝋乃粉を指れそるふ法け

てはやをはなる
▲角粉(つのこ)乃方　鹿角(しかのつの)乃ところ
たる所をさり白き所を小
刀(こがたな)にてこそげけづり少し細(こまか)
にして絹篩(きぬふるひ)にてふるひて
薄膠(うすにかは)にて三紀なる乃粉まる又
小明礬(みやうばん)三分加(くは)へねりまぜ流
るよ○又角粉(つのこ)を藜蘆(おもと)乃汁
にてねる又蛤(はまぐり)乃身(み)の汁(しる)にて
とねてはなるよし
▲青漆(せいしつ)乃方　吉野漆(よしのうるし)とせし

ある漆と等分(とうぶん)少し絵具(ゑのぐ)乃多
ハ丸合ふあハせる乃なし但
ほつくめるよき紀ハ朱漆(しゆうるし)不用(もちゐず)
あるところある漆(うるし)をよしとす
▲朱漆(しゆうるし)乃方　ある漆(うるし)とせし紀
吉野(よしの)ところある漆(うるし)まるなし朱(しゆ)二五
分十分一加(くは)ふ
▲漆(うるし)ハ陸奥(むつ)出羽(では)下野(しもつけ)関東(くわんとう)
よりいづる紙せし先漆とよふ
越上とほ日向(ひうが)米良乃産ハ
その次なり真(しん)乃黒(くろ)めより

小細工ふ用ゆる和泥者の
漆ハ朱鐵ハらるゝふ用へし
中ふ西山形こふあり越お
よりいづるハむ下なり
▲漆こしを法く絹ふ漉　なるほど
古紀布紙　細かふきざみ漆
ふ入よくねりまぜたるを紙
まれ又へむしなるを付てハ紙
訶ハ世一夜日乾し置よく乾
紀たる時はぎめより出たる漆
を小刀を以てこそげれなど

もしてそのちゝく石紙か
ひて又一夜日乾し乾きたる
紀本漉まてみその紀乃
紙漉まて如ら用し色ハ好
こふ古てごうひ漆ふ於ハむく
如ら用し椋乃類受なくハ
まげ物乃類見合ふ用へし

○用火

▲ホくち乃方　煙草乃黒焼五分焔硝まぜるを細末し竹乃筒ニ入て用ゆべし火の付事甚速なり

▲老人又ハ病人乃室ニ氣をふさぐ火桶ニハ消炭を用ゆべし樫の炭ハ火ニ氣つよくして悪し一法あり樫炭又ハ消炭乃くだけたるをよくくだきて粉とし海蘿汁にて

ねり柚乃大さに丸め干乾し
て用ゆべし火の氣消ざる
ほどよくわかし置バ終夜火た
えずしてよしそれで老人
病人ともに終日終夜火鉢
にあたるは悪しき寒からざる程
度としておくハ火氣に乏
ざるべし
▲老人夜具ハ寒氣を防ぐに
ハ大なる銅乃湯婆を四方と
蓋とを布にて袷なる袋にいれ

夜着乃内へ入れて腰又ハ足を
温むるに用ゆべし右乃銅の
蓋乃裏を銅すてそくべし
付炭または右の炭団を用ゆ
べし
▲灯心を沢山に熱湯に
浸し晒し乾して用ゆれバ
久しくやせに
▲油かハらけハ常に用ゆるよハ
朱塗の後かハらけを用ゆれ
し常の土器ハあしく油を

蕎麦にて汚れし紙用ゆる人あ
まことに冥加なし
▲あんどうハ早く油かえてよき
けしうち紙用ゆべからず紙新
しきもハ火よく紙ハ貴ぶべ
紙ハ美濃紙を用ゆべし雑
紙ハ火きえやすし
▲杉原紙乃黒焼を海苔維汁
にて練りかためたるに火つけ
柄にてかきまぜ懐中すれバ久
しく火きえず軍書にあり

▲炭をはげしく水にひたし置く
後日に干乾し用ゆれバ花を
しておしよにてまことに宜
ほうばれ是ぞ宗者乃法なり
常にても宜て火の炭あやまる炭
ハ此法を用ゆべし
▲冬月火鉢へ火入れるの火炉に
る炉ぶちのす法にて合せ火氣
乃通ひやすくして蓋炭もちよし一
炉乃上にお得ひ炭なし火鉢
あやまり雑誌筆紙かへしむ

うまミなしむ小豆を潰しむの
火加ハ火をはやくせざるに
ぜんて小豆ハ温めさまへられ
▲沙を風乃あたらぬやう八草麻
子乃沙を少加ふべし
し
▲飯を焼ハれ初め火気乃通
らざるほどハ火をよく焼べから
ずほよく焼てうれし玉子を黄し
て益多し火気釜内へ通り
しる時ハよく焼てよく煮へあがるの
やうにせ心しよく煮ゆりり

よろしくハ又中ろく焼ごしかくの
ごとくせまは玉子を黄さずし
てよろしく好飯となる
▲置竈乃下へ塩を入てあを
バ火を通さん
▲有明乃灯ハ猫はまく無ある
さ蓋をして鼠乃害をふせぐ
べし灯心をひかへ火をあや
まらぬ事あり
▲火打箱ふ火石いれまば透間
ありて焼ぬくる事あり宜

あふんを合わし洞にて肉を
とりくるがよし
▲榉乃木を皮を焼ばよくやけよく
して煙なし炬火又ハ蠟燭
ふ用ゆべし　五雜組
▲爛石　地榆を以よく酒ふ浸し
石乃よふ至て焼て灰となれ
ハ石鼎嫁り
▲くぬぎの木を池水ふ数十日
浸し置たるをくでをよく干
乾して炬火ともさば一本

ふて数十里ハもたしといへり
▲火燵ふ火を入いるれば炭
を堅くふして木口乃上ふ向へ
やうふもやし炭を横ふおと
まばきえんやすし　但灰乃冷
さふ火を入るる時ハ志ばらく
灰ふ火氣乃通るを待て
おほひをかし袖より冷るる灰
ふくおほへばきえやすし
▲冬月乃火燵火入ホハいぬる
时火をけし一本ふあつかう

の近所へ物を寄せざるやうに
すべし　○すべて常にハ火を
用心すべし

▲蚊帳に火の付たるハすみやく
切おとし箒にてふミけし戸外にても
有合ものにておさへけすべし
若病人蚊帳の内にあらバ
顔に衣服などおほひ穀とあ
くるに引出すべし

▲奥の方の土蔵書屋などにねむ
人ハ火災の時廃亡せざるやう

に諸家といひ合せ置臨機の
やぶり器ハ引たゝせて出べし
病人あらバむざと覚悟すべし

▲火災の時金銀の余の
たしなみして携へ出がたき物
ハ地をふかくほりて埋め並べ
しよそ五寸以上の土をおほ
ひおくべし火の通さぬ地は
家間なれバ冰臺の類地よ
りこまかなる細砂などをこの
あと埋め置べしすべて

火災の時地をふかくほりて
物を埋おかば火を通さゞれ
▲穴蔵なくば家より大なる
壷を穴蔵のごとく蓋をして
らへいくつもうづめ置て火災
の備となすべし酒桶を用ゆ
るもよし
▲火災の時人家に近き堀或
ハ池川へ物をなげ入置ときは
よくふかく置く水中へ沈み
焼ずしてのちに水より上

へ出しおく火付たる時上の方
焼るにまどひ皆浮て出てや
くる
▲土蔵ある人火災にあひ
御本履ける金細引水鉢に
残据乃へ退て土蔵をはやく窓
をふさぎ助くる俵をもたらし家に
近き土蔵に火の入ハおほくハ
戸前を開く事おそれし故也
火氣内に通ずるなり
▲火災の時穴蔵に人を入

て家財を入るゝ時ハ内にあり
人皆出るやうと戸をかけよ
く穴あく桶蓋をもちべし
人ある所を知らずしてあやまる
事あり
▲壁にはさみてある竈ハ隣付
の方へ荒砂を入べくあるべし
火壁に通るべからずしてよし
▲百姓の家又ハ郷士の家に
出火あるときハはやく牛馬を追
放ちやるべし後日まぎれざる
やうに兼て毛色をよく見て記
置べし

日本居家秘用巻六　八思編

○紙細工

此部にハ屏風襖乃はりやう表
具乃しやう軸巻物乃仕立やう
折本乃折やう唐紙裏打乃仕
やう押絵色紙短尺乃押やう
紙に地乃仕やう絵賛れ燐気
とりやうはくらひやう床乃張
やう砂子まきやう泥乃けしやう
紙に罫引やう法帖乃押やう
書物乃損じたるを直しやう
礬水地紙乃こしらへやう雨濡
子ほこらのとりやうまでをのべ
て一切紙細工乃趣あることを

ふかしてあつかふべし

○紙細工

▲屏風張方　先釘紙をあて
継紙してその四隅まで初ふ
板を御のうち又ハ水そうきをせ
そし張れりて水を打ぜし
次ふみの紙かく源骨毎ふ糊
を付けし次ふみのれきかうし
て端をたちきり蝶はぎの紙
をぜし板をあふてさひあ
四厘まさてかの余蝶はぎの

紙ハ唐紙ひとへまくりの上紙
合せ紙にても是紙なるにか
ろくしにありて切次に浮
ぎり紙とろ耳ぞうに粘を付
骨まてはなれ浮なりけれバ
表張をも乍し下れ一版紙
をりて屏風紙逆さ伝に立て
そろあり浮をせれ上紙をろ
あり是にて裏表六返あり
裏ハ浮張乃上二三返をりて
粉地をよ乍し

▲粉地乃方　白亜 百目　墨 一五五分
右細末し水まて称り粘紙く
ハへて引乍し次に海蘿に墨
紙く入て模紙付乍し
▲蝶尾寸法　五尺乃屏風なら
バ上下紙五寸ニして中を四
ふろれよそ六尾なり大小
によりて又異なり
▲縁附方　古方乃一文字通り
と云なるハ竪縁をはぎて
横を端まで通しなり当

流れ角といふ六隅から隅へ
切合ものなり是を又中へ二ふ出て
合せともいふなり
▲屏風縁寸法　高さ五六尺
乃時ハ縁乃廣さ一寸七八分
但小縁ともあり小縁ハ二分
また三分までもあり高さ三四
尺なれば縁一寸三四五分横三
尺高さ八九尺乃時ハ二寸七八
分なり
▲屏風押絵　先上下と定む

家なれば押絵紙を屏風乃一間
縁より中まで一寸ふよせて余り
下を三ッふわりて上二ッ下一ッ
と定む但上乃千分一紙下ふ取[?]
少面し横乃寸法ハ縦ふよせて
あまり下を二ッわりし左右ふ用
ひ又安乃絵の一枚ハ入れぜの方
を絶と同すわして竪縁乃方
を挟くと深あり
▲色紙短尺画押法　先冠紙
定め次ふ額を定むた故紙

尺合せて押あり是紙角と
いふ四方乃角ハ紙定むかしよ
去しかり又二ツあり定て押
を定といふ四ツ六ツをも同
し又三五七八半といへども一ツ
は押ど色紙短尺計方画ホ
を押交家とれ形じ上下左右
の寸法紙定めて四隅より押
えじめて中ハいふを中と寸へ
し四时乃哥の古絵へ御製
乃哥絵と真草乃ところ

あり墨絵八上位小押あるし
二ツ三ツあるへ押しある乃寸紙
極めて遠ハ紅やうふもあるし
その寸乃半分、紙用ひて付札
と色紙とれ間のす小定む色
し下のす法ハ上乃寸の半分
を履乃すとし上の十分一紙
押ふあるし是はね事の人の
秘事あり

◆表具作方　先表具する
紀地古裂おさてうハ水を引て

一 うすにかけ居絵ハ裏に
水ばかりはけ下地の裏紙を去
て糊紙を引ひて腐糊にて
裏打し絵の表紙并に
て飛張に付置を打して継
よく切放一文字に付中縁又
上下をつぎ軸挟乃紙を剥
まし其紙にて裏を打継て
剿中縁乃通りより裏乃
方へ引かへし風帯を付け
乾し置又裏よりこゝろ水

をひき板乃上にて立ハ分紙
やうに乾たる刷毛にてよく
なで四方に糊はけにて飛張
にはり付四五日程經てから
して其張紙たちより鬼莎以
にて裏を摺揉にて軸と標木
を付てかけ紙打緒紙つ
くる口傳あり○巾表具の時
ハ其端を折返して浮裏
を打なり○濟風帯ハ一文
字と同色なり付風帯ハ

中縁と同色なり
▲腐糊作方 冬月寒を入て水とし白麩を樽の壷に
いれ土中に半年うづめ置て用
用ゆれば数年を経てよし
腐すれて浮きしれ新糊銭
物にあらず大幅物には糊つよ
き小幅にはうすくすべし
巻用には麺室に入置なり
▲軸物巻切方 先軸を紙切
にして巻奥乃紙の縁の所

を矩の手紙よくあはせ折て折
目に糊を付て軸に巻て別
に髪紙のやうに小く切その
紙をもて小口を堅く巻付
て軸紙一方ずつ指入てよ
り一分ずつ内に押入て此
軸の小口紙目当にして切也
又一方もかくれざるやうにして紙
をまき方これを軸末紙にさ
出し引き合て是に糊を付
て指入べし

▲毛邊紙に唐紙打方

先裏をうつには紙をぬらし糊盆にして浮石にて紙の端をすりきりてくひされ紙のごとくまはし四方ともにかくのごとくして粉麩の糊にて張れて書置浮に唐紙の裏より水を刷毛にて湿しまたよくならし又張るに紙を唐紙の横の幅にて画に唐紙より広く切れば

その後板の上に唐紙を並表を下にして刷毛にて六かれやうにまで張る板に切並べ紙をのせて表を下にならし唐紙の裏に当て板裏紙の余りしろ下を一方板に糊をつけて付並糊を付ける下へ二重に便ぜせて板の紙へ打かへし板裏紙の表に糊を引て上下共角までに板の手にてより他のごとく唐紙

乃やうにかぶせうけてよく〳〵水
刷毛にてすてはくなり此
引うへ上る時ハに傷ありよく
里紙へあてれば志ハになりよく
よりずいぶんところをやり
に亀乃田面にあられやう
なりあと志ちに引かゝりなき
里如此ましひさる所ハ少く
しまれよせてみその次を
膠乃志よく次背にあてよせす
ずにおかりて他乃所へかけて

乾しよくありての後礬水をもて
して日向に倚し但し原紙
乃上張れ地をせきして
よろし
▲礬水乃法　黄明膠十五
明礬五匁　水一升　細に膠
を水中に泡して柔になり
たる時急ぎ鍋の中へ熱湯に
いれそれをとかしかきまぜ
世膠乃とけたる時明石の
粉をいれてかきまぜ冷し

てはらけふて唐紙ふ引へ
し又地してぬきさる時う
の傍書乃耳ふ粘を付て
縦張ふまり付中ふ風を吹
入させとよし○唐紙一枚ふ
水一合のはかり又紙ならば
八七匁屏風なれ五匁ふて
よし○絹地ふ引なれ水紙
三倍ふして引べし
▲毛邊紙縦張乃方
膠地をさつて唐紙の表ふ

水を引て返して書のまゝ
ふ粘紙はけ又その真中ふ水
を引てあまふてれしてわり
よりふ押付水をはけふてるで
ほゞそろあり但紙をおし
切て裏紙の縦のた乃竪れ
際ふ付まくはさぐ時ふ是
より道をいれてあり強て縦
ふより切事はりの心を付く
べし
▲繪賛乃類紙気取やう

蕎麦稭を焼したるの汁をさ
伸し其表具紙よりて板乃
上にひろげ其上に又外
乃紙を重ねてはけにてよ
つくと五六度かさねて乾し
重ね置し湿気さる
▲絵絹墨跡乃宜しきをてう
をはくるひやうしハ先板の上
に別乃紙をはくらに重ね
本紙より八幅を広くして
先水を引てよく板になで

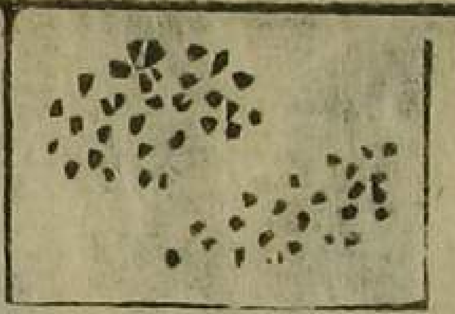
付るのちにはくらに重ね本紙
を表を下にしてのせ又其上
より水を引よく志めりあらハ
ふでにて付薄糊にてあしくハよく去
又其付薄糊乃紙を志づか
に夜さり本紙やぶれぬやう
不あらバ類紙に糊を付て
はくらひ折目あらハ紙を細
くきりて糊を付て当べし
是紙わきふひとつに 但わきとうひを貼されハ猶よし
又折目いづつ 掛新に書おして乾

し蓋取る時板の上に伏せ
裏ちかけにて水を引しあり
まうれ付志ハあれやうに
まで付四方乃端ニ粘を付
纈張にしう付乾かし
▲紙ニ印子ま候やう小判箱
箱挟とは篠竹乃細にひくさき箱
盤底乃程の厚さとして板ニ四方
盤乃程の方ニ粘おくすり付く但草
とねものの方へ
新綿にいて の上へのせ箱切乃竹
篠竹の様して末びくろて
けまりて朶に付り をとりく
ねふきうびひ切たし板切り

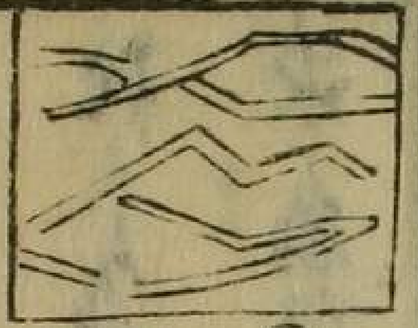
箱に箱切の外の方ニく紙
へきぐれうつし振箱 竹の箱の底に貼ふ
てうひのごとくますし へ入置板取子
度挟ハねふ置ろし
まくがれ紙は板乃上ふひ
らげ海蘿汁に綿ふくらし
きうにそく振箱乃切箱
紙ニ力の類は切たゝれ振
れもしてまくかし板ましれ
ようふ別の紙ニ宛そし
まで付かるべし 蓋乃四方
の端ニ粘ニ付纈張ニて

よく乾かすべし

○微塵梨子ハ筒篩の底
紙絹にてこしたるもの



皮毛紙幕の如く柔へるをおろし
○とも筒ハ篩の底を
竹篩のごとくに目を
まづよく筒を入茶箋に
てとくとおろすべし　一遍よく
はらひて又二三遍とも右の
ごとく茶筅にておろすべ
し



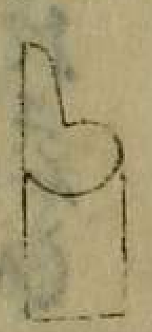
○のれ筒ハ筒盤にのせて
竹刀にて細くきざみ筒を
よくよくおろし紙にてこすべし

○梨地梨子ハ山乃形露ハ
雲どりされ大概乃様
様ハ漆にて合せたる紙
にくりの形をこしらへ金梨子
まきちらし紙に高くまくべし
あしらひの雲どりあいだ筒
にてまきまくべし
▲金銀乃泥を消法　先肌

のりを入たる器に箔を五十枚又
數二百枚を入膠水にて
かろくふし指のさきにてまぜ
ばく箔にまとひ付てけをおとし
大なる皿に付して水を入箔に一
面に付たる箔一面に泛ひよせい
させ置て上水紙しづかにしてさ
すて火にかけ薄膠水を加へ
手をとゞめずかきまはし水乾
たる時ハ膠水をまぜて加へ
水多き時ハ火にかけいく度も

かくればよく指のさきにてまわり
付たるをおとし絹すは麻のごとく
水を入ひさせ置上水をすてゝ
捨置し墨にはうかされハ水氣
おもの紙筆にてかきあげは
うるたく主人置てたハおもかくか
け乾し置へし
一紙に卦引する法　先卦幅の
かす紙揃ゐ割の紙に下紙
付是紙卦引る序紙に附て
上下に針にて数枚に合紙通

して下紙は常にしめりし紙目
当(あて)ふし定木(ぢやうぎ)にて罫(けい)を引
べし　白罫(しろけい)ハ竹箆(たけへら)にて引べ
し　墨罫(すみけい)又ハ泥(でい)にて引ときハ
筆にてまぜ先(まづ)別(べつ)の紙に引
てよろしく筆の毛並(けなみ)を調(ととの)ひ
そろはぬがひて後引べし
罫筆(けいふで)ハ鹿(しか)の毛にて細(ほそ)
く拵(こしら)へ真(しん)に竹を細(ほそ)く
けづり毛(け)をそへて中に入れ組
右の心(しん)ハ常(つね)の筆の心(しん)のごと

を毛先(けさき)よりおろしそろへてつけて
結(むす)びし極罫(けい)を引時ハ

かくれざるやうにくさびを篠竹(しのだけ)を
入れ罫筆(けいふで)の軸(ぢく)の先(さき)にそへ
あさやの先(さき)の切あてしる方を
罫の方にして定木(ぢやうぎ)にそへ筆の毛(け)
先罫紙(さきけいし)に当(あて)るやうに

定木
かくれざるやうにして引べし
▲折本紙折法(をりほんかみをりほう)　先(まづ)紙(かみ)を継(つ)ぎ
かくて巻(まき)継(つぎ)して糊(のり)を一夜ほど
乾(かは)しよくかわかし時折幅(をりはば)

こすに正しなれと折ちかへたれハ
折形を正すにして かく
乃ごとくにし紙乃表を下にして
て折方ハ本紙面折目を付る
但紙に紙乃下乃方を定木に
て曲がこなれやうに都合をそろへて継
なし折目を付る時下乃方に
て揃へて折目を付なし継まで
かくれなきやう折目紙付板折目を
口乃方より右乃手にておさへひ
ろけ行儀にて末のところに口を

手より紙をそろへ端乃方を小口を
おさへ手よりてを取かへ左乃手
にて折目紙付なしかく乃ごとく
なお折りて板端乃方乃折
目に重ねなから刷毛にて水
を引てよくしお乃方乃折目
を板に当てころをやうに
おして紙まよりの合やうにむ揃へ
してた紙付なしに口をそろひ
より時貴なる板乃上にのせ上
よりと貴なる板乃類をも重

押をかけ乾し置なるべし押をかゝる時にじ又ゆがみすぢ寄やうになるべし

▲唐本の書裏打する法　唐本に裏打するには先裏打の紙を板の上にひろげ正麩糊をうすくとき紙しる銭一面に刷毛にて引其の上へ本紙を一枚表を上にして引かけ真中より乾ける刷毛をおろし表方へ去ハ表紙やうになで付べし

又其の上へ裏打紙をかさね糊を引右の如く本紙をひろげなで付べし六枚とも二枚ともかさねて右の如く裏打して凡一枚ほど裏打紙の端をとりて棹或ハ細引を引てにかけて乾を待べし能乾きたる時に日紙にて石盤にて打べし

▲和本紙湖に浸するは大分盥桶の類に水を入塩よし

加へ書籍乃表紙をはがし
水ふ浸してしづかふ潮を浚ひ
出し板乃類ふて上下より挟
こたよく押をかけ置その後
干ほしもし乾たる時石盤
ふてむらなくうちは志八ない
ぽろのびる

▲古本乃小口よごれ有るハ大根乃志ぼり汁ふて洗ふ

▲唐本ハおほく連史紙ふ破
れたる紙を用ゆ也へ破れ挟

してちりこれおほし初ふ海
蘿汁乃うへ此紙をのせて端を
付置かわしまさて唐紙
はくらふては海蘿汁を用へ
し

▲紙帳を造る法　先紙数
二方乃端の出るやう小筋違ふ
羽重ふして糊を付紙帳乃
広さ紙をかり四方と天井乃
紙を継合し扨天井乃紙を
畳乃よふ並幅を極め四角

ふ釘をさし鉤に芋縄を四
角れ釘ふかけて引はり天井
乃紙の端を糊ふて芋縄ふ
はけ板四方乃たまる紙付り
たまる乃四隅八双ふはぎ合
せ置しむすそ廣くある様
ふ角乃方ふ背を入へし
▲銀箔を押る上ふ礬水
をうすく引と紙八久しくさ
びん
▲銀紙或字ふする法　新ふ

銀箔をおする紙乃上ふ別の
紙或ハ更て硫黄或ハ粉ふて
一面ふ置ものの上紙また〻ふて
ちくのぜちぐし　かくれるぐ
をきげ又は枝かるとく〻かうる
襖障子或ハ紙を上ふそる〻ふ
宮ふ用ゆるは右乃ゆきの
ハかくのごとくもなし香包
紙乃上ふ新ふ銀泥或ハ金
泥ふて絵とかう文字なと
書たるハ紙しろ色とのあり

▲皮籠すりの外糊にてはりたるハ鼠乃喰ふものハ糊乃中へ蒟蒻玉をおろし加ふれバ鼠くハず又竈乃灰をおろし加ゆるもよし

▲油紙にて雨障子乃やぶれたるはうらに糊付ざるとは糊の中へ生姜乃志ぼり汁をお加へて糊よく付てはれまで

▲雨障子 大根或ハ小ずれ志ぼり汁を紙に引ときハひかりよし又端を包めば三四日六持ずれ但臭でしたる跡あくてあふりて用ひがよし

▲木目紙 杉板乃木目よきやうに揉搓おろしたるをまとめ竹乃さゝらにて板をすれハ木目乃所ハ高くなる紙好の染汁を刷毛にて引書板を揩おとくふきとろなし不同よ色紙ふうなり

▲澁粕の法　薇の粉をよれ
加減に粕にまぜ入れあはし壺お
温りある時澁をかけて加へ
よくかきまぜてのぶれは冷し
一度に袖より澁紙おほくいる
ときは粕しかすし又冷て後も
澁とく粕しかさし餘り擦れも
澁の氣よくつくりうのなど
紙表に乾し

▲書畫の類一切紙に油の付
たるは古綿をとぶれ粉に

しくいりて擦れを厚さ五
分ほと上下に置てよく押を
かけ一夜置て油よくぬける
但和の紙を一枚置ずて衣
の粉の毒に付ざるやうにすべし
汚る紙の数ある時は何
枚と衣れずよくふして重ね粉
を置て又滑石紙用ゆ
とよし

▲曼珠沙華の根を煮て
よくそり煮て奥粕に用ゆれ

ばやくうつして表具損ぜは
なりと糊をなすべし
▲張床等の張かへ紙久しき
を経ては虫すむ糊の中へ番
薬乃奠汁を加ふれは虫蝕
生ぜずといへり